

# 妙音の観察

## 密教法具に見る松虫・鈴虫銘

まだ残暑は厳しいが、それでも天王寺公園が虫の音に包まれる季節になった。虫の音を心地よく感じるのは日本語を母語とする脳の働きによって左脳でこれらの音を理解しているためらしいのだが、この感覚が人類に普遍ではないと説かれても、左右の脳を意識的に使い分けることのできない身としてはこの清けき音色を雑音としてとらえることは難しい。

さて、この虫の音に関わる密教法具についてここでご紹介しておこう。当館が寄託を受ける大阪・高貴寺所蔵の重要文化財・金銅三昧耶形五鈷鈴(右図)は鈴身に三昧耶形をあらわす金剛鈴としては東京・護国寺の品と双璧を成すと謳われる勇壮な作例で、その力強い造形からは想像もつかない高く澄んだ音色



高貴寺 金銅三昧耶形五鈷鈴

を響かせる。そうした音色によるのか、『河内高貴寺縁起』には弘法大師が唐の青龍寺恵果和尚より請来した「松虫宝鈴」と記すが、これを示す箱書等はない。

同様に松虫銘を持つ作例は少なからず存在するようで、箱書や伝承等によって知られる「松虫」および「鈴虫」の銘を持つ金剛鈴をまとめると、その例は表のように十指に余る。なお、「鈴虫」銘の金剛鈴は例外なく「松虫」銘の鈴と対となることは注意されてよいだろう。類例はなおこれにとどまらないはずで、今後の調査を要する。松虫銘の由来をその音色によるものと安易に推測したものの、他の鈴との音の比較という点では形態の比較ほどの例が重ねられているわけではない。銘は多くの場合が後世に付与されたものと考えられ、研究史上さほど重要視されてこなかったようだ。つまり、鈴の持つ本質的価値とは無関係とみなされてきたのだろう。しかし、金剛鈴のもっとも本質的な機能はその鈴が鳴ることであり、本来はその音色にも耳を澄ませ、鈴の持つ価値を判断しなくてはならないはずである。

そんな中、最近奈良国立博物館で信貴山朝護孫子寺の松虫銘金銅五鈷鈴のやや低い音と鈴虫銘銅五鈷鈴の高く澄んだ音がそれぞれの虫の音に対応し、銘にふさわしいとの解説がなされるのを目にする機会があり興味をひかれた。ところが、このスズムシとマツムシについてはその呼称が入れ替わっている可能性が国文学研究の分野を中心に長らく議論されており、鈴の音色と虫の音を比較するには慎重を要する。つまり、唱歌風に言えばチンチロリンと鳴くマ

表 松虫・鈴虫銘金剛鈴一覧

府 県	寺院名	名 称	伝来等	銘
1 埼玉	宝聖寺	銅鈴	平将門調伏祈祷所用	松虫
2 大阪	高貴寺	金銅三昧耶形五鈷鈴	弘法大師請来	松虫
3 和歌山	無量光院	松虫鈴	弘法大師請来	松虫
4 和歌山	成慶院	金銅五鈷鈴	武田信玄遺愛品	松虫
5 広島	西国寺	銅梵釈四天王五鈷鈴	弘法大師請来	松虫
6 広島	龍華寺	銅鈴	弘法大師請来	松虫
7 京都	大通寺	金銅五鈷鈴	弘法大師請来	金琵琶(松虫)
8 京都	大通寺	金銅五鈷鈴	・東寺宝輪院伝来	金鐘児(鈴虫)
9 京都	仁和寺	銅三鈷鈴	伝教大師請来	松虫
10 滋賀	延暦寺	銅三鈷鈴	伝教大師請来	鈴虫
11 奈良	朝護孫子寺	金銅五鈷鈴	命蓮上人所持	松虫
12 奈良	朝護孫子寺	銅五鈷鈴	興教大師所持	鈴虫
13 兵庫	太山寺	金銅宝珠鈴	弘法大師請来	松虫
14 兵庫	太山寺	金銅五鈷鈴	弘法大師請来	鈴虫

ツムシをかつては鈴虫と呼び、リンリンと鳴くスズムシを松虫と呼んでいたのだという。しかも、この名称の転換が歴史上二度起こっている可能性すらあるといい、問題を複雑にしているのだ。

いずれの松虫・鈴虫も命銘の時期は定かではない。銘に関わる一般論としては『満濟准后日記』によると永享六年(1434)にはすでに茶道具に銘が与えられていることが知られ、武具を見れば源氏八領のように甲冑に銘が与えられていたことが『保元物語』はじめ軍記物に頻出することから、遅くとも鎌倉時代中期までには器物に命名(銘)していたことが知られる。器物ではないが、『日本書紀』応神紀に見られる「枯野」や『続日本紀』と『播磨国風土記』の「速鳥」のように船に命名した例が挙げられ、古代より人工物に命名する文化の存したことがうかがえる。今後は松虫・鈴虫銘の命銘時期をも考慮して慎重に議論する必要があるだろう。

密教法具の研究は、美術史・工芸史分野の常道として、まずその形態把握とその比較検討が中心となり、金剛鈴の場合もその例に漏れない。また、宝物館や美術館ではケースの中に展示される。観覧者に許されるのはその色と形、質感などを視覚的に楽しむことであり、音色については想像するよりほかない。実は作品調査の折にも音色についてはほとんど記録がなされていないのが実情で、そもそも文化財保護の観点からも無闇に打ち鳴らすことは憚られるのだが、今後は録音も含めた記録手法の確立が必要であろう。いずれにせよ、音色の違いを意図的に反映させた銘であるのか、単に音色の良いことを虫の音に喩えただけなのか、今後耳を澄ませて調査を続ける必要があるだろう。

音は見ることができない。しかし、調査研究がまとまるまでしばらくの間、ご観覧の皆様にはガラスケース越しに耳を澄ませて見ていただくしかなさそうである。

観音菩薩と申すのは、音を観るとの事ぞかし…

白隠禅師

(児島大輔)